

Title	メアリ・ウルストンクラフトの伝記について
Sub Title	On Mary Wollstonecraft biography
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1970
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.63, No.5 (1970. 5) ,p.387(35)- 396(44)
JaLC DOI	10.14991/001.19700501-0035
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19700501-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

いていえば、銀は穀物よりも良い尺度である。ただし、その同一量はより精密に労働の同一量を支配するからである⁽²⁵⁾という展開がみられるのであるが、このような展開は、銀の価格変動と穀物価格に関するこのような精密な歴史的研究をその背後においていたのではなからうか——同時にそれによって規定される限界を含みながらではあるが——と考えられるのである。銀の価値の変動についての歴史的叙述が、何故 *Wealth of Nations* においてその第1編第11章の「余論」という位置づけをあたえられるにいたったかは、別に考察すべきことであって、以上の手紙からは、もちろん、

何もいえない。この「余論」は周知のごとく「地代論」の「余論」として展開されているのであって、それは独立の一章を構成するほどの分量を占めている。

しかも「余論」は地代論と直接に関連する問題に限定されているとはかならずしもいいがたい。そして、逆に「手紙」の方からみるかぎり、そこで論じられている銀の価値の変動は、地代論との関連というよりははるかに、価格の水準を歴史的にどのように考えるべきか、したがってそこから価値尺度の探究といった研究の関連でとりあげられているように思われるのである。

注(26) たとえば、Karl Marx, *Theorien über den Mehrwert* (vierter Band des „Kapitals“), [Dietz Verlag Berlin, 1956] 1. Teil, S. 114. 「…価値の規定における動揺に加うるに、つぎのような〔概念の〕混同があるということ、すなわち、価値の尺度において、内在的尺度、——同時に価値の実体をなすもの——が、貨幣は価値の尺度であるというような意味での価値の尺度と混同されるということ、これである。そして更に、この後者について、他の諸商品に対して恒常的度量者として役立つような、不變的価値をもつ商品を見出そうとする試み——門の求積法〔不可能事〕——がなされる。」

メアリ・ウルストンクラフトの伝記について

白井厚

1

人類の長い歴史においても、夫婦もしくはそれに準ずる一組の男女が、共に優れた才能を発揮し、共に相似た分野において人類の進歩に貢献した例は決して多くはないが、われわれはその稀なる例を、詩人のロバート・ブラウニングとエリザベス・ブラウニング夫妻、ラジウムを発見したジョリオ・キュリとマリ・キュリ夫妻、作曲家ロベルト・シューマンとピアニストのクララ・シューマン夫妻、フェビアン協会のシドニー・ウェップとピアトリス・ウェップ夫妻、詩人の与謝野鉄幹と晶子夫妻、そして実存主義者のサルトルとポーヴォワールなどに見ることができる。ゴドウィンとメアリ・ウルストンクラフトは、後にジュリの妻となった娘の出産に際して不幸にもメアリが結婚後六か月ほどで亡くなってしまったために、夫妻というにはあまりにもはかないものであったとはいえ、疑いもなくこうした稀なる夫婦の一例であり、しかも、次に述べるような特筆すべきいくつかの特徴をもっていた。

まず第1に、彼らの結婚は18世紀の末に行なわれており、他の例に比べて最も早い。夫婦それぞれの社会的活動、女性の家庭からの解放が見られるようになるのは、特殊な貴族階級などを除けば19世紀以後のことであって、ウルストンクラフトは、おそらく歴史上最初の女性の職業的著述家であり、同じく文筆を業とするゴドウィンとの結婚生活は、当時としては極めて特異なものであったろうと思われる。そのような例は、現代においてもなお例外的なものであり、彼らは、こうした例外的な夫婦のまさに先駆をなすものであった。

第2に、彼らは文筆を業とするというだけでなく、共に優れた非常に先駆的な思想家であったということ

である。ゴドウィンは、主著「政治的正義」によって近代アナキズムの最初の理論家となり、一般にはマルサスに「人口の原理」執筆の契機を与え、彼と人口論争を行なったことで有名となるが、その思想は、私有財産、資本主義を批判、共産主義財産論を展開して、空想的社会主義者オウエンやリカード派社会主義者たちに大きな影響を与え、その哲学はサウジヤコールリッジやワーズワスらロマン主義詩人たちを感動せしめ、特にジュリを圧倒的にその影響下に置いた。さらに、「イギリスにおけるフランス革命」期の急進的社会思想の代表者として、ロンドン通信協会や初期労働運動にも、そしてさらに現在に至るイギリス政治思想にも、影響を及ぼしている。また一般にはあまり知られていないが、その著「研究者」においてルソーを越えた近代的な教育観の成熟を示し、「ケイレブ・ウィリアムズ」によってフランス革命期の思想小説を代表すると共にアメリカ文学の源流となり、「イギリス共和制の歴史」によって、ピューリタン革命を重視してイギリス革命史をウィッグ的の革命観に転換するなど、多方面にわたって思想家として重要な役割を果たしたのである。これに配するにメアリ・ウルストンクラフトは、女性が完全に独立して自らの思想を持つに至った最初の例であって、主著「女性の権利擁護」の一書によって最初の女性解放思想の体系的な思想家となったことはもちろん、みずからの体験にもとづく処女作「女子教育考」を書いて女性教育史に一石を投じ、「人権の擁護」を書いてパークの「フランス革命の省察」に対する攻撃の先鞭をつけ、またパリに行って「フランス革命の起源と進行についての歴史的・道徳的見解」を発表し、北欧に旅して優れた旅行記を残し、小説「実生活実話集」や「女性の虐待」を書くなど、38歳という比較的短い生涯ながらも12冊の著書や翻訳を出版して、

これも思想家として多方面の活躍をした。この二つの独立した思想の接点が、恋愛というかたちで燃焼したのである。

第3に、彼らはその思想の帰結を大胆に実行し、その結婚の形態はまた極めて特異なものであった。熱烈な恋愛をもって結ばれた二人は、それぞれの信念からして法律の承認を求めず、子供の誕生が近づいたために正式に結婚してのちも、近くに部屋を借りて離れて仕事をした。自由な恋愛、法律の否定、別居結婚と、現代に引き移してみてもそれはかなり特異なものである。急激に反動化した当時の社会において、慣習的な結婚制度に反逆したこの二人は、少数の親友を持ちながらも、世間一般からはさんざんの悪評を浴びせられることとなった。

第4に、この夫ゴドウィンは、妻メアリとの短い結婚生活ののち、その伝記を書き残したことによって、この夫妻の特異性をさらにきわ立ったものにしていく。メアリは、単なる著述家ではなく、また単なる思想家でもなく、なによりも行動の人であった。その短いがはらんに満ちた生涯を顧ると、美貌に恵まれ特にその眼の輝きはサウジイを感嘆せしめたというばかりでなく、才能と徳と愛情と勇気と信念と健康と勤勉を兼ね備え、多くの挫折や不幸にもかかわらず、それを乗り越えて、「彼女自身はその著作よりも偉大であった」。そしてゴドウィンは、彼女の死の翌年に、彼女の「遺稿集」と共に伝記「『女性の権利擁護』の著者の思い出」を出版し、そこで、妻を単に理想化するのではなく、妻に対する深い尊敬や愛情と共に、学者としての誠実さをもって、メアリの挫折や不幸を、一人の人間(女性)のなまなましい成長の実態を、克明に再現した

注(1) H. R. James, *Mary Wollstonecraft, A Sketch*, 1932, p. xiii.

(2) ゴドウィン研究の面から見れば、「思い出」はメアリに対するゴドウィンの感情を詳しく伝え、彼の最盛期から失意の時期に至る転換期を示し、また理性万能の Godwinism の修正が始まったことを現わしている。「この書は、他の点ではゴドウィンの純粋な合理主義の崩壊を示している」。B. R. Pollin, *Education and Enlightenment in the Works of William Godwin*, 1962, p. 9. たとえば、「われわれが最も親しく知っており、その人の幸福と共感がわれわれ自身の幸福と共感に結びついているような人々に対して、われわれが最も強い関心を持たないということは不可能である」。W. Godwin, *Memoirs*, ed. by W. C. Durant, p. 127. (Passages rewritten in the second edition) 「思い出」の初版に反映された「ゴドウィンにおけるこの心の変化(家庭的愛情の重視)は、数ヶ月後に出版された2版において十分明白なものとなった。それは、家庭的な愛情は、徳と両立しないどころか、それによって認められ、支配されていることを示そうとする文章を含んでいた」。David Fleisher, *William Godwin, A Study in Liberalism*, 1951, pp. 109-110.

(3) 「彼は、彼女の死後すぐに遺稿集のために彼女の論文を編集し伝記を書く仕事にとりかかったに違いない、というのは、9月24日曜日の最初の記入は「Life of W. G. p. 2」だから。彼は、メアリの死後14日目には、「思い出」を書き始めていた。……「思い出」のための原稿は残っているとは考えられない(1836年にゴドウィンの原稿を売り出した時にもないし、Abinger Manuscriptsの中にもない)」。Shelley and his Circle, ed. by K. N. Cameron, 1961, vol. I, pp. 200-201.

のである。この「思い出」は、メアリについて書かれた最初の伝記であって、ウルストンクラフト研究のための貴重な基礎資料であるというばかりでなく、もちろんゴドウィンの研究にとっても重要な文献であり、また産業革命とフランス革命の進行する18世紀末ヨーロッパに生きた特異な女性の生涯を再現することによって、そこに登場するけんらんたる人物の群像と共に、当時の歴史研究、思想史研究にとっても重要な文献なのである。

2

メアリは1797年9月10日に死去した。生まれたばかりの子と3才の子の2人をかかえて、ゴドウィンは途方にくれ、友人たちに助けられて埋葬をすませたものの、他の仕事に手がつかず、亡き妻の書き残したのばかりを読み、メアリの思い出のみをたどったことと思われる。その結果発表されたものが、翌年1月に出版されたメアリの「思い出」と、「遺稿集」と、そして亡き妻をモデルに書かれた99年の小説「聖リオン」の三つであって、それぞれに亡き妻に対するゴドウィンのなみなみならぬ執着が現われている。

「思い出」は、妻の死後14日目にはすでに書き始められており、早くも3カ月あまり後には、メアリの著書を数多く出版した同じジョンソン書店から次の書名で出版された。

MEMOIRS OF THE AUTHOR OF A VINDICATION OF THE RIGHTS OF WOMAN. (再録) BY WILLIAM GODWIN. (再録) LONDON: PRINTED FOR J. JOHNSON, NO. 72, ST. PAUL'S CHURCH-YARD; AND G. G.

AND J. ROBINSON, PATERNOSTER-ROW, 1798.

これは204ページの小型本で、内容は、誕生から死に至る彼女の生涯に添って10章に分かれ、それに正誤表とメアリの簡単な著作目録がついている。彼女の生涯は、不遇の生い立ち、両親や弟妹たちに対する献身的な世話、教育者としての実践、リスボンへの渡航、教育論や小説や翻訳の執筆、パークのフランス革命論に対する反撃、女性解放思想の展開、フランスにおける革命の体験、スイス人の画家やアメリカ人の冒険家との恋愛とその挫折、フランス革命論の執筆、二度にわたる自殺未遂、ゴドウィンとの恋愛と別居結婚など、まことに劇的な要素に富み、配するゴドウィンやプライスのような思想家、ペインやロウアンのような政治運動家、イムレイのような冒険家、J. ジョンスンのような出版界の大立物、ブレイクやサウジイやジュリのようなロマン派の詩人、S. ジョンスンのような文壇の大御所、シドンスのような劇壇きっての名女優、インチポールドのような女流劇作家、H. M. ウィリアムズのような女流詩人、天才的な画家フェースリ、ギヤスコインやオウグルのような国会議員、フォーダイスやクリスティやカーライルのような著名な医師、ザルツマンのような学者、クレアやヒューレットのような牧師、キングスバラ子爵やスラブレンドルフ伯爵やイスト男爵などの貴族、その他イトン校の助教論プライア、数学者ポニキャスル、会計検査官アンダースン、化学者プリーストリ、バーグ夫人など当時の代表的急進的知識人たち、そして親友ファニイと、誠に多彩な人物が登場して、彼女の短い人生にいろどりを添えている。ゴドウィンはこの中から、特にメアリの家庭状況、ファニイとの交友、フェースリとの恋愛、イムレイとの恋愛、ゴドウィンとの恋愛、死の状況など、特に彼女の人間的な面に重点を置いて、彼女の生涯を描いた。その際に、これは死後ただちに悲しみの中で書かれたため、短時間とはいえ自分の妻であったウルストンクラフトについて、「このような人の姿と生涯を詳しく示されれば示されるほど、われわれは一般にその運命に同情を感じ、その優秀さにあこがれるであろう」ということを、私はほとんど疑いえない。「彼

女以上に、一般の利益と進歩を強く希求する性格を持った人の例は、あまりない」「おそらくヨーロッパを通じて、彼女ほど偉大な名声を得た女流著述家はかつてなかったであろう」「容姿は美しく、最良にして最も魅力的な意味において女らしい態度の女性」「女性がこれまでに誇らねばならぬ人の中でも最も確固たる闘士であり、それこそ最大の誉れたべき人」「こんなにも素晴らしい肉体と精神の組織を兼ね備えた人は、百万人に一人もいはいない」と形容し、そして彼女との間の恋愛、結婚については、「私は、あえて言うならば、互いの交際においてこれほど純粋で洗練された満足を見いだした人というものは、これまでに存在しなかったと思う」とまで言っている。こうした表現はやや誇大であり、特に日本人の謙譲の美德とは異質なものであるが、ゴドウィンは、決してただ感傷的に妻を美化したのではなく、事実彼女は、こうした賞讃に値する優れた女性だったのである。ゴドウィンはまた他方において、自分の愛情に忠実に、しかも学者としての冷静さを失わずに、彼女の著作や性格や行動における欠点を適確に指摘し、ふつうは隠したがる先夫との恋愛や挫折の過程などを、必要以上と思われるほどに詳しく述べているのである。こうしたことについてゴドウィンは、「思い出」の初めの部分において、「以下のページにおいて詳しく述べられている事実は、それに関係している人の口から主に聞いたことであって、彼女を知る人はそれが正確で率直に語られていることを、おそらく疑わないであろう」と述べているし、現代におけるウルストンクラフトの研究者であるウォードローは、「ゴドウィンは賢明にも、彼女の伝記においてメアリを弁護しなかった。そのかわりに、彼は自分の知っていることや、彼女の著作や、ヒュー・スキーズやジョウジフ・ジョンスンのような友人から与えられた知識からできるかぎり正確な彼女の伝記をつくった」と述べている。

こうしてこの「思い出」は、もちろん完全な伝記ではないにしても、今日でもその正確さを疑われることはほとんどなく、「イギリス文学における偉大な伝記の一つで、彼の亡き妻に対する感動的なまた力強い賛

注(4) W. Godwin, *op. cit.*, p. 6.

(5) R. M. Wardle, *Mary Wollstonecraft, A Critical Biography*, 1951, p. 314.

(6) たとえば、ゴドウィンによれば、メアリはフェースリに恋をしたがそれを賢明にも抑えた。後の伝記作家のK. PaulとPennell夫人は、それは誤りで彼女は冷静な友情を抱いたにすぎないと言っている。しかしG. R. Preedyの説明に従うと、フェースリの遺言執行者John Knowlesは、メアリの手紙を発見して彼女の恋愛を証明した。フェースリ夫妻は「思い出」が出版された時も生きていて、ゴドウィンの叙述に反対していない。またゴドウィンによると、メアリは

(9) 辞”と評価されている。

同じ年に「遺稿集」が、次の書名、内容で出版された。出版社はやはりジョンソン書店である。

Posthumous Works of the Author of a Vindication of the Rights of the Woman, published with notes and introduction by William Godwin, 1798.

その内容は、

Vol. 1. *The Wrongs of Woman: or, Maria, a fragment.* Vol. 1, xx, 181 p.

Vol. 2. *The Wrongs of Woman: or, Maria, a fragment.* Vol. 2, v, 196 p.

Vol. 3. *Letters and miscellaneous pieces.* Vol. 1, ix, 192 p.

Vol. 4. *Letters and miscellaneous pieces.* Vol. 2, viii, 195 p.

その中に含まれているものを示すと、

(a) *The Wrongs of Woman: or, Maria, a Fragment.*

(b) *Letters to Gilbert Imlay.*

(c) “Lessons” for Fanny Imlay.

(d) “Hints” for the Second Part of “the Rights of Woman”.

(e) *The Cave of Fancy.*

(f) *Essay on Poetry, and Our Relish for the Beauties of Nature.*

(g) *Letter to Mr. Johnson.*

(h) *Letter on the French Nation.*

これにはさらに次の版がある。

(i) London, 1879. (Edited by C. Kegan Paul)

(ii) London, 1908. (Edited by Roger Ingpen)

「思い出」と「遺稿集」の仕事を終えると、ゴドウィンは小説「聖リオン」(*St. Leon, a Tale of the Sixteenth Century, 1799*)を書いた。その女主人公マーガリート(Marguerite)はメアリをモデルにし、彼女と聖リオンとの結婚生活は、ゴドウィンとメアリの結婚生活を理

想化したもので、前に書いた小説「ケイレブ・ウィリアムズ」ほどには流行しなかったけれども、美しい文章をもって知られている。これはまた、ゴドウィンに及ぼしたメアリの影響、ゴドウィンの思想変化を示す書としても重要であって、ゴドウィンはその序文で、“私は、家庭的な、個人的な愛情というものが、人間と切り離せないことを、精神文化と呼ばれるようなものと切り離せないことを理解し、それが、それを持つ心の中で正義の深い活動的な感覚と矛盾しないということを十分に納得した”と述べている。彼は、メアリの影響によって、家庭的な情愛は人間の本質的な、不滅な部分で、行為の強力な動機であり、人類の幸福を増進させると考えるに至った。このようなメアリの影響は、「政治的正義」の第三版に附した“諸原理の要約”にも現われているところである。

3

ゴドウィンがこうしてメアリに関するいくつかの著書をつぎつぎに発表したのは、メアリに対して当時かなり批判があったために、メアリの真の姿を知らせて非難に対抗する意味があったと考えられる。メアリは、女性でありながらパークの「フランス革命の省察」に最初の反撃を加えて支配階級のイデオロギーに公然と反旗をひるがえし、また「女性の権利擁護」という挑戦的な書名を掲げて、広く世を蓋っていた因襲・偏見に最初の反逆を行なった。そのために、彼女は一部の急進主義者たちの間では評判となったが、女性解放運動のための実質的な条件を全く欠いていた当時あって、一般には悪罵と嘲笑をもって迎えられ、“理屈を言う蛇”とか“ベチコートを着たむく犬”などと非難されていた。さらに彼女はフランスに渡ってアメリカ人のイムレイと法律と宗教を無視して不法の結婚をし、それに破れると、国家と財産と結婚制度を否認す

2度目の自殺に失敗したあとイムレイとその新しい女と共に暮らすことを提案し、Pennell夫人はこれに信じがたいと言っている。だがPreedyは、メアリのような状況にあった女性は其の恋人を失わないためには途方もないことを考えるもので、自殺へとかりたてた絶望は、もっと大きな屈辱をも耐えさせるものだと考え、ゴドウィンは当時メアリの友人たちに知られていることを書きとめたので、つくり話をするようなことはなかったであろうと言っている。G. R. Preedy, *This Shining Woman, Mary Wollstonecraft Godwin, 1759-1791*, 1937, pp. 309-310.

注(7) Kenneth Neill Cameron, in *Shelley and his Circle*, vol. I, p. 21.

(8) やや感傷的な Pennell 夫人の表現によると、“メアリ・ウルストンクラフト・ゴドウィンは人類のために献身的に活動し、しかもこれほど非難的となった女性は少い。彼女は聖 Vincent de Paul のごとき熱情をもって苦悩する同胞の救済のために没頭し、しかも彼らからは天鞭 (scourge of God) のごとく恐れられた”。E. R. Pennell, *Mary Wollstonecraft Godwin*, 1885, p. 1.

るゴドウィンと再婚したのだから、急進的な理論は道徳的な退廃と結びついたものとして、“洗練された社会”から排斥されたのである。その上に、イギリス政府は革命のフランスに対して宣戦を布告して国内の弾圧態勢を強化し、急進主義的な思想家や運動を、English Jacobins, ロベスピエールの手先として糾弾するなど、社会状況もメアリに対しては極めて不利となっていた。

ゴドウィンは、メアリに対して批判的なこのような一般の感情を柔げようとしたが、“しかし彼は、この仕事のためには最も不適當であった。彼と本当に親しかった友人や同調者の小さな仲間の外では、彼は決して人気のある人ではなかった。メアリの生活における最大の不幸は彼の妻であったことであると思っているような人さえいた。”⁽⁹⁾ “政治的正義”を発表して一時は“名声という大空の太陽として輝いた”⁽¹⁰⁾ ゴドウィンも、反動期においてはかつての名声を失い、やがては支配階級の理論的武器であるマルサスの「人口の原理」の出現(1798年)によって忘却の流砂に埋められることになるのだが、再婚の妻に対する率直な讃辞は、その正確さ、公平さ、男らしさ、勇氣、愛情などを一部では高く評価されたとしても、“一般に敵意をもって迎えられ、彼がそれ以後の年に文筆の世界から受けることとなった状態を、前もって彼に味わさせたのである”。その時代がたとえ社会の急激な反動期ではなかったとしても、「思い出」はやはり快く世に迎えられることはなかったであろう。亡き妻に対して遺稿集と伝記と小説の三部作を発表するというような例は当時あまりなかったろうし、ましてやメアリのように古い慣習から逸脱した女性について、ゴドウィンのような特殊な思想の持主が讃美し、しかも先夫に対する失意の恋を事細かに記して、遺稿集にはその手紙まで加えるという

ようなことは、ゴドウィンからすれば当然のことではあるが、極めて異常なことであつたに違いない。⁽¹¹⁾

そこで、これは激しい非難を招く結果となり、R. R. ホールはその有名な説教において、ゴドウィンの結婚観と普遍的仁愛の説を攻撃し、その追憶文を“みだらな色恋の話”(a narrative of his licentious amours)にすぎないとのしり、墮落や不行跡を見た時には、“こんなことができる者がゴドウィン以外にも居ようとは想像できなかった”と叫ぶのが常だったといわれる。またドック・クインズイは、“イギリスの大衆は、ゴドウィンを、喰屍鬼か、血も涙もない吸血鬼か、またはフランケンシュタインによって創り出された怪物のように忌み怖れた”⁽¹²⁾と書いている。また、メアリは、「思い出」によってその生涯が明らかになると、彼女に対する批判は生存中よりも一層激しくなり、彼女はこの時期のいくつかの風刺小説や詩に露骨に取り上げられた。たとえば“George Walker の小説 *The Vagabond* (1799) において、‘新しい哲学’に対する悪気のない攻撃があり、主人公は、‘女性の権利擁護’と‘思い出’(注で著者はこれらの書に言及している)から道徳の理論を得たメアリという名の既婚の女性の好意を得るのに何の困難も見いださない。またRichard Polwhele の詩‘男のような女たち’(*Unsexed Females*, 1798)においては、メアリは解放を叫ぶ恥知らずな雌ぎつね集団の指導者にされた。⁽¹³⁾ さらにChalmers の *Biographical Dictionary* の中に記されたメアリについての短い伝記は、彼女にまつわる悪評を永続させるのに最も役立ったといわれている。“その時代の新聞や書物はやがて読まれなくなって、辞書は標準的な参考文献として長く使われた。この論文においては、メアリの生涯のあらゆる行為は悪く解釈され、彼女の性格は恥ずべきものとさげすまれた。Beloe は、*Sexagenarian* において、*Biograph-*

注(9) Cf. R. M. Wardle, *op. cit.*, p. 321. フランス革命におけるジャコバン党の思想、立場、政策は、小ブルジョア階級の自由な生産と交換が実現される社会を理想とし、急進的ではあるが所有権擁護の限界があった。政治思想としては、大衆の政治的成熟よりも政治権力の直接獲得を実現しようとする革命的過激主義を言う。イギリスでは、フランス革命に影響され、こうした傾向を持つ革命的過激主義を English Jacobins と呼んだ。

(10) E. R. Pennell, *op. cit.*, p. 2.

(11) W. Hazlitt, *The Spirit of the Age, or Contemporary Portraits*, 1825, pp. 29-30. 神吉訳 29-30 ページ。

(12) George Woodcock, *William Godwin, a Biographical Study*, 1946, p. 148.

(13) “サウジの嫌悪は、‘彼の亡き妻を衆目にさらすような感情の欠陥’と彼が呼んだものによって、10倍も強められた。” Ford K. Brown, *The Life of William Godwin*, 1926, p. 134.

(14) D. Fleisher, *op. cit.*, p. 40.

(15) R. M. Wardle, *op. cit.*, p. 319.

(16) *Ibid.*, p. 320.

ical Dictionary の口ぎたない悪口を借りたし、この辞書はさらにイギリスの文学や百科辞典の歴史においてほとんどずっとメアリの性格と教説の正しい評価として受けいられていた。⁽¹⁷⁾

4

さらに当時の新聞・雑誌における「思い出」の批評は、かなり厳しいものであった。“幸いにも一二の例外はある。1797年9月の *Monthly Magazine* において彼女の死亡記事を書いた人は、彼女について非常に賞讃の言葉をつらねたが、これはおそらく彼女の親しい友人によって書かれたものであろう。一年後にこの雑誌は、半年間のイギリスの文献を回顧した時に、やや異なった意見を示していた。彼女の死後1か月たった1797年10月の *Gentleman's Magazine* における批評は、好意的ではあるが、それを賞讃するには警戒的であった……”

1798年4月、これが出版された直後と言ってもいい時に、それは *European Magazine* によって迎えられ、それはこれまで現われたものでも最も烈しい痛罵の一つであり、そして *European Magazine* の意見は最も一般的に受け入れられ、メアリ・ウルストンクラフトの名が出版物中で触れられた時には、ほとんど必ず繰り返された。⁽¹⁸⁾

さらに、ウォードゥルは次のように記している。

「思い出」と「遺稿集」は、ほとんど全般的な不人気をもって批評家たちに迎えられた。確かに、*Analytical* 誌はメアリの因習にとらわれない行為や理論を誠実に弁護したが、そうすることによって——そしてゴドウィンが彼女の主義の根拠を説明するのに失敗したことに遺憾の意を示すことによって——その評者は、ゴドウィンがあえて書こうとしなかったような弁護を試みたのである。他の雑誌の中では *Monthly Mirror* が最も好意的で、「思い出」は細かい点では退屈であり「女性の虐待」はしかるべく評価するには不完全なものだと評しているが、メアリの人物とイムレイへの手紙をとてつもなく賞め讃えた。しかし一般的に言えば、書評家たちはメアリの私生活を詳しく知ってこれに憤慨し、彼女の異端的な行為を許した人たちがさえも、それを明らかにしたゴドウィンの率直さを非難することでは一致していた。*(British Critic, XII, 1798, pp.*

注(17) E. R. Pennell, *op. cit.*, p. 3.

(18) *Ibid.*, pp. 2-3.

228-35; *Gentleman's Magazine, LXVIII, 1798, pp. 186-87; Monthly Review, New Series, XXVII, 1798, pp. 321-27; Critical Review, New Arrangement, XXII, 1798, pp. 414-19; Monthly Magazine, V, 1798, pp. 493-94; New Annual Register for the Year 1798, p. 271; Monthly Magazine and American Review, I, 1799, pp. 330-35. を見よ) Robert Bisset 博士の *Historical Magazine* は、「思い出」は1798年における“最も有害な”書物とまで言った(*Historical Magazine, I, 1799, p. 34.*)そして書評家たちのうちで最も悪意のない人ですらも、おそらく伝記作家 William Roscoe の詩を認めたことであろう。*

汝の運命はその生涯のどんな時にも苦しかった、娘として、姉として、母として、友として、また妻として、

だがそれは死において一層苦しかったのだ、石の心を持つゴドウィンにこうして弔われて、

(この詩は、1冊の「思い出」の何も印刷してないページに書かれていた記憶から William Shepherd 博士が記したもので、*Notes and Queries, III, viii, p. 66.* に記録されている。)

もちろんこの主張は、甚だ不公平なものであって、ゴドウィンが「思い出」を書いた時ほど彼の心が優しい思いに満ちていた時はなかった。だが、それでももし彼が彼女の欠点を述べるに当って慎重であったとしたら、メアリの名声をそれ以上損ねることはなかったであろう。

ただちに、メアリは嫌われていたジャコバン主義の象徴になった。トーリー党出版物の口の悪い機関は激しく彼女に立ち向かい、彼女の記憶を冷酷な合奏でけがした。どういふものか、有名な *Anti-Jacobin* の若者たち——メアリが1786年にイートンを訪れた時その学生であった George Canning と John Hookham Frere を含めて——は全く彼女を攻撃しなかった。彼らの雑誌は1797年11月20日から1798年7月9日まで週刊で出ていたにもかかわらず、また彼らは時折ゴドウィンとヘレン・マリア・ウィリアムズを攻撃したにもかかわらず、「思い出」を無視し、メアリについて一言もふれなかった。しかし、*Anti-Jacobin* の後継誌の月刊の *Anti-Jacobin Review and Magazine* は、その創刊号で彼女を攻撃した。その編集者は、「女性の虐待」についての苛酷な書評をもって始め、次のように結論する。

“しかし、理論においては道徳を破壊するような意見を公然と持ちながら行動においては反道徳的ではなかったような著述家があったので、ゴドウィンは、ウルストンクラフト夫人の理論は行動に移され、彼女は書いたり教えたりした通りに生活し行動したということを、世に知らせるよう努力した。”*(Anti-Jacobin Review and Magazine, I, 1798, p. 93.)*

それから、彼女のあらゆる行動について厳しく批評しながらメアリの生涯を要約して、「思い出」の激烈な批評を続けた。その評者は、彼女の恋愛事件と自殺の試みを非難したばかりでなく、両親を尊敬しなかったこと、フアニイ・ブラッドを看護するためにリスボンへ行ってしまっ、ニューイングトン・グリーンにおける彼女の生徒をかえりみなかったこと、そして債権者から逃れるためにアメリカへ移住する計画をしたことを攻撃した。そして、あえて明言はしないことをほのめかしている。たとえば、“この伝記の著者は、彼女の多くの恋愛に触れていない。”*(Ibid., p. 97.)* けれども評者は、メアリの例は他の人たちに對する悲惨な警告としては役立つかもしれないと考えて、慰めを見いだす。“[ゴドウィン]によって警告となるべく意図されて、それは浮標として役立つおり、それは、何を求めることが賢明であるかを示してはいないとしても、何を避けることが賢明であるかを表わしている。”*(Ibid., p. 94.)* そして結論において、彼は *Analytical* 誌が「思い出」と「遺稿集」に好意的な書評をしたことを攻撃し、このような Jacobinism のあらゆる証拠を見つけ次第宗教的に闘うと予告した。とどめの一撃はこの雑誌の索引のところにおいて行われ、“売春”の項目において、その編集者は“メアリ・ウルストンクラフトの項を見よ”と指示したのである。

ゴドウィンがその妻の記憶に名誉を与えようと準備した書物について、きびしい書評はこれのみにほとんどまらなかった。*European Magazine* における「思い出」の書評は、これと同じようにきびしかった。その評者は、メアリを“哲学的な浮気女”ときめつけ、彼女の行動を宗教の無視に帰し、この書は“少しでも優しい心を持っているあらゆる女性によって嫌悪され、宗教や道徳に関心を持つあらゆる人によって憎悪され、その欠陥は忘れ去られるべきこの不幸な女性に対して

いく分好意を持つ人によっては憤慨されて”読まれるであろうと予言した。*(European Magazine, XXXIII, 1798, p. 251.)* 彼はまた、メアリの生涯の説明において道徳的な教訓を見いだし、それは、社会の法に挑戦することの危険性を有効に示すものであった。この点を強調するために、彼は、以前にメアリを雇っていたキングズバラ卿の家庭に当時起きていたスキャンダルを取り上げた。漠然と示されたこのスキャンダルは、メアリがアイアランドにいた時に教育していた少女の一人メアリ・エリザベス・キングのことであった。問題は、キングズバラ夫人の兄の子供ヘンリー・フィッツジェラルドが、彼の若いいとこと恋におちいったことに始まった。すでに結婚していたのに、彼は1797年初頭に駆け落ちをして発見され、この少女はアイアランドへ連れ戻された。しかしながらこの年の10月に、フィッツジェラルドはミチェルスタウンへ行き、彼の恋人を取り戻そうと決心した。しかし彼は、キングズバラ卿とその息子ロバートによってキルワース近くのホテルで発見され、短い言いあいののちに、キングズバラはフィッツジェラルドを撃った。老キングストン伯爵はやがて死に、キングズバラ卿が後をついだので、彼は議会最高法廷において彼の同僚から審問され、無罪の判決を得た。ここで話は終り——メアリ・ウルストンクラフトのことを除いては、*European Magazine* は、実は彼女に罪があるので、彼女は1787年にメアリ・エリザベス・キングの心を邪道に導いていたということの意味している。このような仮定がまじめに考えられていたとは信じがたいが、それは明らかにそう考えられていた。少なくとも *British Critic* は、数カ月後にこの話をむし返し、再びメアリはこの悲劇に対して責任があると攻撃した。*(British Critic, XII, 1798, p. 230.)*

5

1798年1月に出版された「思い出」は、こうして当時の新聞雑誌の書評によって、ただちに非難の総攻撃を浴びたため、ゴドウィンは、同じ年の数カ月あとに、若干の修正をほどこして、同じ書名で THE SECOND EDITION, CORRECTED/LONDON: /PRINTED FOR J. JOHNSON, NO. 72, ST. PAUL'S/CHURCH-YARD./ 1798.

注(19) R. M. Wardle, *op. cit.*, pp. 316-9. 「思い出」の Durant 版には、当時の書評として、*The Analytical Review, The Monthly Mirror, The European Magazine, The Critical Review, The Monthly Magazine, The Anti-Jacobin Review and Magazine, The British Critic, The Monthly Review, The New Annual Register, for the Year, 1798* が再録されている。

として第2版を出した。オウピイが描いたメアリの肖像画を初めの部分に載せ、正誤表を扉の裏につけ、巻末のウルストンクラフトの著作目録をなくしただけで、体裁はほとんど変わらず、ページ数は199ページから206ページに増えている。W. C. デュラントによると、“この‘第2版’においてはやや慎重になって、ゴドウィンは多くの変更を加えた。たとえば、パーキング附近にいたおりにジョウジフ・ギヤスコイン家が‘メアリの家族と’‘しばしば交際していた’こと——ウエイルズにおいて‘アレン氏という人の家族’と‘ウルストンクラフト家が知りあったこと’——‘バスのドウスー夫人’の‘すでに成長した息子’のこと——‘来世の罰についての理論’をメアリが信じなかったこと——その他誤解されるような挿話などを削除している。ゴドウィンは多くのところで言葉づかいを変え、二カ所で教行にわたって書き改められた。彼はまた、ここかしこに追加を行なった。”第2版のために全く書き改められた2カ所の文章は、フェースリに対するメアリの愛情と、メアリとゴドウィンが互いに及ぼした影響に関するものである。

「思い出」は、さらに同じ年に「遺稿集」と共に2冊本でダブリンから出版され、1799年にはアメリカ版がフィラデルフィアで、またドイツ語訳が *Denkschrift auf Maria Wollstonecraft Godwin, die Verteidigerin der Rechte des Weibes, von William Godwin, aus dem Engl. übers. von Christian Gotthilf Salzmann, Schenpenenthal, 1799.* として、1802年にはフランス語訳が *Vie et mémoires de Marie Wollstonecraft Godwin, auteur de la défense des droits de la femme, d'une réponse à Edmund Burke des pensées sur l'éducation des filles, traduit de l'anglais par le citoyen D****n, Paris (Testu), 182.* として出版された。アメリカではさらに、1802年と1804年にフィラデルフィアで出ているし、1912年には、*Erinnerungen an Mary Wollstonecraft, übers. von Therese Schlesinger-Eckstein.* というドイツ語訳も出ている。ゴドウィン自身は、なぜか第2版までしか出していない。

その後に出たもののうちで最も重要な版は、メアリの“最も誠実な、貞節な、信頼しうる恋人”を自認する W. C. デュラントの、入念な、“研究者にとって最も利用価値のある”⁽²⁰⁾ 次の書である。

注(20) *Memoirs*, ed. by W. C. Durant, a note on the Text, p. 3.

(21) *Ibid.*, p. xlv., Preface to *Memoirs*.

(22) R. M. Wardle, *op. cit.*, p. 342.

MEMOIRS OF MARY WOLLSTONECRAFT/ Written by WILLIAM GODWIN/ And Edited with /A PREFACE/ A SUPPLEMENT/ Chronologically Arranged and containing hitherto Unpublished or Uncollected Material/ and/ A BIBLIOGRAPHICAL NOTE/ by/ W. CLARK DURANT/ 1927.

これは限定700部で、その内容は、主として図書館員と索引作成者への言葉、メアリ・ウルストンクラフトの時代と生涯(年表)、「思い出」への序文、本文、「思い出」への補足説明、文献解説、索引からなり、13枚の図版を含み、全部で xlvii + 352 ページの膨大なものである。本文は、改訂前の初版を底本とし、第2版によって内容が一層正確に明瞭になった場合には第2版の文章に変え、脚注に *1st. ed.* として別文が示してあり、初版の文章を採用したところでは、第2版によって改訂された別文をやはり脚注にすべて示してあり、また本文でカッコにはさまれている文章・句・語は、第2版で新しく加えられたものである。さらに第2版のために全く書き改められた2カ所の文意が、本文の終りに加えてあるので、これは各版を正確に再現・比較することができ、極めて便利な版と言うべきであろう。ゴドウィンのつづり字、句読点、大文字・小文字の使用法にもすべて厳密に従い、不必要と思われるコマも全部のせ、改めたただ一つの特徴は、古いかたちの‘s’だけだと言っている。

さらに、序文においては、Schlabrendorf, A. Alderson, Mrs. Siddons, M. Hays, Southey, Godwin, W. Blake, Shelley, Mary Shelley, K. Paul, A. Gregory, Mrs. J. West らの、彼女に対する讃美の言葉が集められ、「思い出」への補足説明においては、メアリや友人の著書や手紙などの多くの資料と共に、「思い出」が補完され、文献解説においては、「思い出」各版のフル・タイトルと、これに対する当時の書評が再録されているので、この貴重な版によって、ウルストンクラフト研究、特にその伝記の研究は格段の進歩をとげることとなった。H. R. ジェイムズによれば、“この補足説明は時間をかけたぼう大なもので、書物の魅力である楽しさをもって書かれている。その上に、補足説明には、愛情のこもった熱心な研究の成果が含まれており、それが、メアリの生涯に一層正確な知識を加えた。……デュラント氏は、*Indiana University Studies* (No. 57,

March 1923) 第10巻にある Rusk 教授のイムレイ研究を利用し、そしてアメリカとヨーロッパにおける彼自身の熱心な研究によって、いくつかの細かい点を明らかにした。”

今日一般に用いられている便利な版本は、Constable's *Miscellany of Original & Selected Publications in Literature* の1冊で、ロマン主義的な文芸評論家 John Middleton Murry (1889-1957) が編集した *Memoir of Mary Wollstonecraft by William Godwin, with a preface by John Middleton Murry, 1928.* である。マリは、女流評論家、小説家 Katherine Mansfield の夫で、二人は共に先駆的な思想と才能を有し、彼女は不幸な結婚のち1912年にマリと同棲し、1918年に正式に結婚したのち34歳の若さで亡くなっている。ウルストンクラフトの生涯に一派通ずるものを感じたものであろう。⁽²⁴⁾ マリの思想はキリスト教的社会主義だが、ロマン主義と近代主義の傾向をあわせもち、一時共産主義の傾向を示して、「共産主義の必要」(*The Necessity of Communism*, 1932) などという書も書いている。マリの短い序文は、「思い出」がこれまでの忘却のふちから救出されるに十分値いするものであることを強調し、この書が出版当時道徳的墮落を示すものとして非難されたことは運命の逆説であって、これは伝記の小傑作というだけではなく、まれなる心づかいをもったゴドウィンの性格を物語るものだと述べている。本文および本文への注意書きは、デュラント版と全く同じでありながら、そのことに対することわり書きはない。(最近の広告によると、メアリの「女性の権利擁護」とゴドウィンの「思い出」が1冊になって、イギリスの Gregg International Publishers Limited から出版されるようだが、現在まだ入手していない。)

6

ゴドウィンに関する最初の本格的な伝記である C. K. ボールの「ウィリアム・ゴドウィン、その友人と同時

代人たち」(C. Kegan Paul, *William Godwin: His Friends and Contemporaries*, 1876) は、ゴドウィンの孫にあたる Percy Shelley 卿のもとにあった多くの未発表の手紙や草稿を用いて書かれたものだが、12章中4章がウルストンクラフトに関する章にあてられ、ウルストンクラフト研究としても画期的なものであった。そこで用いられているのは、メアリが妹のエヴェリーナ、エリザベス(ビショップ夫人)、ジョージ・ブラッド、ジョンソン氏、ロウアン氏に宛てた手紙、またフアニがエヴェリーナに、ビショップ夫人がエヴェリーナに宛てた手紙、およびメアリとゴドウィンの間の手紙、ゴドウィンの日記、メアリの娘の記録などで、特に別居結婚を試みた二人の間の手紙が興味深い。C. K. ボールの業績について、E. R. ペネルは次のように評価している。“年々メアリの書はあまり読まれなくなり、他の世代においては彼女の名前は知られなくなるだろうという予言は、その通りになった。しかし近年における彼女の崇拜者キーガン・ポール氏は、彼女のために熱心な努力を続けて、彼女の性格を擁護し彼女の著作に対する関心を高めることに成功した。彼女の生涯についての入念な伝記と、彼女を擁護する格調の高い言葉によって、彼は彼女の名声を再び確立した。彼自身が言っているように、「彼女の死から80年にして、彼女の実際の姿を見ようとする人の眼に正当に彼女を示そうとする真剣な努力がなれた。」彼の試みは成功した。彼の「ウィリアム・ゴドウィンの生涯」において語られているような彼女の悲しい物語を読んだあとには、誰も彼女の道徳的な高潔さを疑うことはできない。彼女に関する彼の叙述は、それにふさわしい注意をひきつけた。それが現われてから2年後に、Mathilde Blind 嬢は、*New Quarterly Review* において、彼が記録した出来事について簡単に素描し、この善良なのにさんざん中傷された女性について率直な評価を示した。”

ポール自身は、この書に続いて三年後に、「遺稿集」に含まれていたイムレイに宛てたメアリの手紙を出版

注(23) H. R. James, *Mary Wollstonecraft, A Sketch*, 1932, p. 171.

(24) マリは、Ruth E. Mantz と共著で、やはり亡き妻の思い出 *The Life of K. Mansfield*, 1933. を書き、また妻の遺稿集を出している。

(25) ボール以前のものとして、British Museum には *A Defence of the Character and Conduct of the late Mary Wollstonecraft Godwin, founded on Principles of Nature and Reason, as applied to the Peculiar Circumstances of her Case, in a Series of Letters to a Lady*, 1803. がある。著者は不明だが、今日読んでも得るところが多いと言われている。Cf. H. R. James, *op. cit.*, pp. 166-7.

(26) E. R. Pennell, *op. cit.*, p. 4.

してそこに熱烈な序文 *Prefatory Memoir to Mary Wollstonecraft's Letters to Imlay, 1879.* を書いている。

ゴドウィン以後において、メアリについての本格的な、しかも女性の手になる最初の伝記は、Elizabeth Robins Pennell, *Mary Wollstonecraft Godwin, in Eminent Woman Series*, edited by John H. Ingram, 1885. であった。これは、主にゴドウィンの「思い出」と、ポールの「ウィリアム・ゴドウィン」とイムレイへの書簡集につけた序文により、メアリの著作とその時代の研究によって補ったものである。これは初めてメア리를女性解放思想として評価しようとしたもので、「女性の権利擁護」の後版 (In England, by Mrs. Henry Fawcett, 1891, in America, by Mrs. Pennell, 1892) を出すのに貢献したが、ポールの書と同じくやや弁論的過ぎて、「ヴィクトリア時代におけるメアリ・ウルストンクラフトの崇拜者たちの見方は非常に高尚なので、やや雲の上の存在にしているのではないかと疑わなければならない⁽²⁷⁾」といわれている。

7

ウルストンクラフト研究にあたっては、著作や伝記と並んで重要なのが彼女をめぐる手紙である。メアリは手紙をよく保存していたようで、彼女のもとへ来たものだけでなく、他人にあてたものも返却されて持っていた。ゴドウィンはメアリの死後「遺稿集」によって「メアリがイムレイに宛てて書いた一連の苦悶の手紙を公開した時に、彼は序文において、この書簡集は「これまで世に見られた感情と情熱の言葉の中でも、最も素晴らしい例を含んでいることがわかるであろう」と論じた。⁽²⁸⁾ だが当時は恋文を公表するという例はあまりなかったし、亡き妻の先夫に対する手紙を、しかも先夫の生存中に発表したために世の非難を招いたことは、前述したところである。この中には、イムレイに宛てた手紙 77 通、ジョンソンに宛てた手紙 16 通が含まれていて、そのうち、イムレイに宛てたものは、*Letters to Gilbert Imlay with Prefatory Memoir by C. K. Paul* として、1879年と 1908 年に再び出版された。ゴドウィンとメアリの間の手紙は、二人の思想家の間の愛情の交流というばかりでなく、結婚後も別居し

注(27) G. R. Preedy, *op. cit.*, p. 310.
 (28) *Godwin & Mary*, ed. by R. M. Wardle, 1967, p. 7.
 (29) *Ibid.*, p. 7.
 (30) *Ibid.*, pp. v-vi.
 (31) *Ibid.*, p. vi.

て通信をかわしたという特異な事情からしても興味深いものである。ウォードゥルによれば、「彼自身のメアリへの手紙、彼への彼女の手紙を、彼は発表しなかった。しかし、その手紙は多くの読者にとって、イムレイへの手紙以上に感動的なことは確かであろう。というのは、それらのうちに、空しく叫んでいる一つの声ではなく、親しく言葉を交わしている二つの声——二人の全く違った人、共に生まれつき独立心が強く、共に個人主義的で、しかも男女の間の恋愛がまさにそうあるべきもの、すなわち火のような情熱の瞬間によって高められた優しいたわりと互いの尊敬をことごとく含んだ恋愛を除々に深めつつある二人の——を聞く二人の人間を、一対の夫婦にとかず恋である⁽²⁸⁾」。だがゴドウィンは、二人の間の手紙 162 通を公表せず、ウォードゥルによれば、日附を入れその順に揃えて保存した。ゴドウィンの死後、これは娘のメアリ・シェリの手に移り、その死後はその子の Percy Shelley のもとへ移り、さらにその死後は、これは三つの部分に分かれて、一部は Bodleian Library へ、他の一部は Percy の相続人に移ってから Bodleian Library へ、残りは Lady Shelley のめで 5 世 Abinger 卿の母である Bessie Florence (Gibson) Scarlett のもとへ納められた。この第三番目のものは、手紙とゴドウィンの日記からなり、現在では 8 世 Abinger 卿の家である Clees Hall に保存されている。ただしゴドウィンが持っていた 160 通のうちで、9 通は Abinger 卿のコレクションからなくなっており、また番号も日附もないものが 2 通ある。

これらのうちで、32 通は、しばしば不正確ながらもポールの書に発表されており、40 通以上が、部分的なものを含めて、ウォードゥルの「メアリ・ウルストンクラフト」の中に含まれている。またいくつかは K. N. Cameron の編集した *Shelley and his Circle* の中にも示されている⁽³⁰⁾。だが 1967 年に至って、*Godwin & Mary, Letters of William Godwin and Mary Wollstonecraft*, edited by Ralph M. Wardle が出版されて、初めて公表される 76 通を含め、二人の間の書簡はその全貌を明らかにした。⁽³¹⁾ “それは驚くべき完全な通信”であって、いくつかの伝記的研究と共に、ここにウルストンクラフト研究の新しい段階が始まったといえよう。

研究ノート

海外における法人税転嫁の実証分析

— K-Mモデルの西ドイツとインドにおける適用 —

古田 精司

まえがき

Krzyzaniak & Musgrave が共同で開発した法人税転嫁分析のための計量モデルは、当然のことながらまずかれらの母国であるアメリカの製造業を中心として適用された。ついで筆者により同モデルはわが国の製造業を中心として適用された。しかし同モデルは単に日米にとどまらず西ドイツおよびインドにおいても適用されるに到っている。ここでは前半で西ドイツにおける同モデルの適用結果を、後半で同じくインドのそれを紹介し、併せて日米における適用結果との異同を比較・吟味することを目的とする。したがって論点の中心はモデル自体よりも推定結果そのものの斉合性⁽¹⁾におかれることになろう。

(1) 西ドイツ法人税の発展と転嫁分析

西ドイツの法人税転嫁に関する実証分析はアメリカのロスキャンプ (Karl W. Roskamp) により実施された。かれは K-M モデルを西ドイツに適用するに先立って、

戦後 (1949~1962年) における西ドイツ法人企業の発展を素描している。ここでは転嫁分析に関連するかぎりでの西ドイツ法人課税制度の特質を若干補足を加えながら要約しておこう。

ロスキャンプによると、戦後の西ドイツ法人企業は総数こそ 2100 から 2400 の間の変動に留まったが、その発展は著しく急激であった⁽²⁾。法人企業の高度成長を総資産額でみると、1949 年に総数 2061 の法人企業が 264 億マルクを保有していたが、1962 年には 1933 の法人企業が 1403 億マルクを保有するに到った。同じく自己資本額についても 168 億マルクから 474 億マルクへと著しい増大を示している。純利潤も戦後しばらくは税法上の優遇措置も手伝って比較的低位に留まったが、1962 年には総数 1933 の法人企業で 33 億マルクの水準に達した。法人企業による減価償却引当金額も 1949 年では 15 億マルクにすぎなかったが、1962 年には 93 億マルクにまで達し、これは資本ストックの生産性を維持するために更新投資がいかに急激に行なわれたかを物語っている。

ところで問題は西ドイツ法人企業が支払った法人税額である。西ドイツ連邦統計局の調査によると、法人

注(1) 本稿の目的は西ドイツおよびインドに適用された K-M モデルの推定結果の紹介ならびに批判および日・米のそれとの比較にある。西ドイツの転嫁推定に関しては、Karl W. Roskamp, "The Shifting of Taxes on Business Income: The Case of West German Corporations," *Nat. Tax. J.*, Sept. 1965, 18, 247-57, インドのそれに関しては、Gurcharan S. Laumas, "The Shifting of the Corporation Income Tax—A Study with Reference to Indian Corporations," *Public Finance/F.P.*, No. 4/1966, 462-73 を参照。K-Mモデルの構成および論理構造の詳細については、M. Krzyzaniak & R.A. Musgrave (4), または古田精司(1)を参照。本稿では転嫁モデルのポイントにのみ触れるに留めた。なお K-M モデルはカナダの法人税転嫁分析にも適用され完全転嫁という帰結を導出しているがここではとり上げなかった。B. G. Spencer, "The Shifting of the Corporation Income Tax in Canada," *Can. J. Econ.*, Feb. 1969, 2, 21-34. 参照。

(2) 西ドイツ法人税法によると、企業形態別に、資本金会社 (Kapitalgesellschaft), 株式会社 (Aktiengesellschaft), 株式合資会社 (Kommanditgesellschaft), 有限責任会社 (Gesellschaft mit beschränkter Haftung) 等が法人税の納税義務が課せられる。これに対し個人企業、合名会社 (Gesellschaft einer offenen Handelsgesellschaft), 合資会社 (Kommanditgesellschaft) 等には所得税が課せられる。A. Rädler (6) p. 50, 佐藤進 (8) p. 187. 参照。